

京都市東山区の福祉と革新の源流を探る II

藤本文朗*、伊藤哲英**、藤田 洋**、吉田まみよ**

要約

私たちは、京都市東山区の「福祉」や「革新」の今後の方向を展望するためには、住民運動の歴史を調べることが大切だと考えた。「『東山の福祉と革新の源流を考える』懇談会」を立ち上げた目的は、その歴史を住民の集団的な力を結集して調べるためである。

本論文は、会で取り組んだ年表づくりを通して見えてきた、次の3点についての報告である。

- 1 日本共産党設立者の一人である谷口善太郎が、東山区の革新運動に残したものについて
- 2 敗戦後の自営業者が過酷な税金の取り立てと闘いつつ、民商や労働組合を立ち上げていった取り組み
- 3 東山母親大会のあゆみ(2003～9年)

キーワード：谷口善太郎、東山民主商工会、東山母親大会

2009年10月2日受理 (実践研究)

1 谷口善太郎と東山区

1) はじめに

京都市東山区今熊野に東山診療所があり、地域医療と通所リハビリテーションの拠点となっている。この診療所は、1952年、京都陶磁器労働組合、東山企業組合、生活を守る会などが中心となって、一口50円の開設募金を地域に呼びかける運動によって、120万円を集め開設された。1955年、京都民主医療機関の結成に参加。1956年、社団法人京都保険会に加入。1964年、安井病院より来嶋安子医師が常勤医として着任。来嶋医師は後、所長となる。

東山診療所は、地域医療機関として高齢者医療とじん肺医療に力を入れてきた。陶磁器労働者の健康を蝕んできたじん肺医療に重点が置かれてきたことの源流を尋ねると、1922年(大正11年)、陶磁器従業員組合の結成を通して成長し、指導的役割をはたしていく谷口善太郎にたどりつく。

そこで、「『東山の福祉と革新の源流を探る』懇談会」の企画として、7月5日に梅田勝氏から「谷口善太郎

の思い出」を講演いただいた。梅田氏は、1972年京都1区から谷口善太郎と共に日本共産党史上初めて複数当選を果たした方である。続いて9月19日に、「谷善祭」を催した。1899年9月18日石川県で生まれた谷口善太郎の110年目誕生日を記念して、娘婿にあたる加藤則夫氏に講演をしていただいた。

ここでは、加藤則夫氏がまとめた「谷口善太郎年譜」¹を中心に、谷口善太郎が東山区に住んでいたときの活動を振り返ってみたい。

2) 京都陶磁器従業員組合の結成とその闘い

革新の灯台とも言われた京都の知事であった蜷川虎三が「京のまち京のひと谷善の顔がある」という句を詠んでいるように、谷口善太郎は親しみを込めて「谷善」と呼ばれていた。以後、ここでも谷善と記す。

石川県の貧しい農家に生まれた谷善が東山区に住んでいたのは、1921年(大正10年)から敗戦直前の1945年(昭和20年)に丹波の日吉町胡麻に開拓農民として移住するまでの24年間である。

* 東山の福祉と革新の源流を探る懇談会

連絡先：藤本文朗

〒605-0953 京都市東山区今熊野南日吉町13

Tel & Fax 075-541-5270

** 東山の福祉と革新の源流を探る懇談会

1921年22歳で、妙法院前側町の鉄道職員の家の二階に下宿をし、清水焼の土谷工場に就職をした。父が小作農でリュウマチのため思うように働けず、谷善は10歳で九谷焼の製陶所へ弟子入りをさせられた。放課後は毎日工場へ通う生活をして、15歳で一人前の職人となっていた。

1922年(大正11年)、陶磁器商工組合製造部が、職人工賃2割の値下げと、新たに業者(親方)になるものに対して2000円の保証金を組合に納めることを発表したため、谷善らは、京都陶磁器従業員組合を結成し、賃下げ・開業条件反対闘争を繰り広げた。この闘争は、谷善の小説「清水焼風景」に書かれている。

この闘争で、組合員の集会場所となったのは、今熊野宝蔵町の即成寺であった。現在の住職から「おじいさんの時代には、特高に追われた谷善を納骨堂にかくまった。特高も納骨堂には入れない」という話や結婚した谷善が住んでいた場所を案内していただいた。

同じ年の7月15日、日本共産党が創立された。陶磁器従業員組合の闘争で大きく成長した青年谷善は創立直後に入党するのであるが、このあたりの状況を梅田勝は次のように書いている。²

「1922年(大正11年)7月15日、日本共産党が創立された前後の谷口善太郎の活躍はめざましい。5月、京都陶磁器従業員組合を結成(青年部長になる)、つづいて京都合同労働組合を創立し組合長になっている。この頃の思い出を谷善は、生前、塩田庄兵衛との対談の中で、『それが4月5月ごろですね。この年の7月が共産党の創立です。ひと月かふた月のあいだに自分もどんどん変わって、とにかく非常にテンポが早いんですよ』と語っている。」

1923年(大正12年)1月1日、辻井民之助宅で開かれた日本共産党京都支部創立総会に出席している。京都最初の党員は、国領五一郎ら6名であった。

3) 3・15事件前後

1924年(大正13年)、25歳の谷善は、京都労働学校設立準備委員となり、校長に山本宣治を迎え、4月1日に開校している。普通選挙実施に備え労働者の教育を進めることは重要な課題であった。当初の校舎は三条基督教青年会館であった。7月に始まる第二期からは、当時移転したばかりの総同盟京都連合会の事務所(今熊野宝蔵町)に移し、二階の六畳2室と四畳半をぶち抜いて教室にあてた。谷善は労働学校専従として、

事務所に住んだ³。

1925年(大正14年)、26歳で徳野そとと結婚。新居は今熊野宝蔵町であった。前述の即成寺の住職に聞いた場所である。結婚式当日、谷善は堀川署に検束されていて、二人が会ったのは1週間後であったという。

1927年(昭和2年)、28歳、長男・一雄誕生。一雄は1944年(昭和19年)3月、16歳の若さで亡くなる。原因は、第一工業学校(今の洛陽工業高校)で特攻隊に志願しなかったため配属将校に憎まれ、霰の中で匍匐前進を3日間強制され、肺炎、肋膜炎、結核と発病したためという。

1928年(昭和3年)2月、普通選挙法による第1回の選挙が行われた。この選挙に、地下の共産党を代表して山本宣治に立候補の説得をしたのが谷善であった。

この年の3・15事件で谷善は逮捕される。14日に帰洛中の山本宣治を宇治花屋敷に訪ね、深夜に帰宅して特高に逮捕された。花屋敷を訪ねるときは、今熊野から宇治まで徒歩であったという。4月起訴されるが、未決中獄中で大咯血をし、京都刑務所から帰される。いわゆる「責付所」で「居宅に監視の刑事をつける」「外出、面会、執筆の禁止」の条件付きであった。病夫と乳飲み子を抱えて、妻・そとは陶器の瓶口づくりの内職で生計を支えたが、惨たんたる日々であった。

1929年(昭和4年)、山宣が右翼の凶刃に倒れたことを知らされたのは、自宅軟禁生活の中であった。谷善は、大きな衝撃を受け、また大咯血をしている。責任を痛感した谷善は、『日本労働組合評議会史』を執筆することを決意し、妻・そとの口述筆記で完成する(翌年5月完成)。巻頭には、「本書をわが親愛なる同志故山宣にささぐ」とある。特高の目を逃れるために原稿は襖の間に隠されていたという。この頃、河上肇の出す『社会問題研究』などに論文を発表しているが、特高を逃れるためのペンネームは16,7にもなるという。

しかし、この頃谷善にとって最も苦しい出来事が起こる。1930年(昭和5年)、河上肇に、新労農党に対する助言を求められたときのことである。3・15事件につづく4・16事件で多くの共産党員が逮捕され、党は非合法化されていく中で、この合法政党に参加すべきか否かの判断であった。後日谷善は次のように書いている。⁴

「ところで、わたしもこのとき大きな誤りをおかした。わたしは3・15事件で検挙されたが、そのころ、獄中で肺患が悪化し、責付出獄で今熊野の自宅に刑事の監視つきで病臥していた。そこへ河上から『新党に参加すべきかどうか』と秘かに相談の使いがきた。わたしはよかろうと答えたのだ。プロレタリアートの党はただ一つ共産党あるのみである。前述1928年12月の、旧労農党再建大会が敵に解散を命じられたのち、党はこの原則にたちかえて新合法政党結成の方針を捨て、それらの大衆を政治的自由獲得労農同盟に再編していた。そして、この頃党内にスパイが潜入して党は大変だったが、労農同盟は存在していたし、党中央も厳然として地下に健在だった。わたしは組織と切れた病床にいたのでこれを知らず、河上に誤った示唆を与えたのだ。申し訳のないことをしたわけである。」

このような経済的にも精神的にもどん底の時期にプロレタリア作家同盟の幹部である貴司山治の訪問があった。1931年2月のことである。「小説を書け」と勧められるのであるが、労働運動の中で育ってきた谷善には、文学は本質的でないもの、遊びの要素が大きいものという偏見があり乗り気ではなかった。「プロレタリア文学は階級闘争の一つだ」と2時間説得されて、再起不能の病人でも階級的に何かの役に立ち、生活の足しになるならと書くことを約束した。処女作「3・15事件挿話」を2日間で、「綿」を1週間で書き上げた。

プロレタリア文学としての最初のペンネームは、須井一であった。「責付出所」で執筆禁止の身であるので、組合活動をして首になった元小学校教師の安達精二を表面上の須井一に仕立てた。ところが、安達が全協のオルグにカンパをしたことから警察に捕まり、以後小説を書かないことを条件に釈放された。このため、ペンネームを加賀耿二にあらため公然と作家活動に入っている。映画のシナリオライターとしての筆名は田井善三である。

1935年（昭和8年）7月、清閑寺霊山町に転居。1945年3月、開拓農民として日吉町胡麻に移住するまでの住居となる。

1939年（昭和14年）2月、長女・佳子誕生。

4) 文学者の力を育んだもの

「小説を書け」と言われ、すぐに書ける力を谷善はどこでつけていたのであろうか。年譜から、小学校の教師の存在が浮かび上がる⁵。

「1912年（大正元年）、13歳。3月、尋常小学校を卒業。成績は主席で、特に担任の土田某の指導を受けて作文はすぐれていた。4月、高等科入学。『貧乏人の子にや学問はいらん』という父親に対し、地主の息子で善太郎を励ましていた教師・山坂某が、自分の弁当箱を毎日学校へ運ばせ、駄賃に授業料の30銭を出すことで高等科入学を承諾させた。この頃から土田・山坂両教師の家への出入りを許され、文学書に接し始めた。二葉亭四迷、樋口一葉、国木田独歩らの作品を読んだが、石川啄木に引きつけられ、啄木を通して自分を見つめ始めた。」

また、18歳から23歳にかけて、短歌結社「からすき」（塾社・京都深草）に、現代口語短歌を投稿している。家族、生活、病身を詠んだものの何首かを、加藤氏紹介の資料から拾ってみる。

五時間も言わず眺めず動かずに細れて行った母の死にぎは

あはれかの病身の父の常に云ふ禄高のこと、金銭のこと

母は逝き父も亡くなり弟をたよる我姉今年は三十さうだこれがほんとの俺だ病み伏してむくれ上がった此身、心が

もう俺も二十一年生きのびた、二十一年苦しんだのだ古郷に父と姉とは苦しんで、俺は異郷に苦しんでいるふるさとの山によく似た山を見てうれしさ余り立ちつくす道

病んで三日淋しく寝ればむらむらと我身にせまる郷愁の念

いたづらに前へ前へと進み来た我過ぎた日のうつろな事よ

5) 今後明らかにしていきたいこと

今回は、谷善が東山区に住んでいた時期の記録をまとめてみた。私たちの会の目標である福祉と革新の源流を探るといふ目標から考え、今後の課題を整理してみたい。

- ① 1950年、谷善は蜷川虎三に知事選への出馬を説得し決意させているが、民主府政時代の東山区の住民自治活動の発展。

- ② 福祉に関する谷善の国会議員活動。
- ③ 谷善の文学作品に表れている福祉と革新。
- ④ 谷善が革新の方向を誤らなかったことと小説の関係。

2 東山区の敗戦直後の状況と自営商工業者の闘い (東山民主商工会創立のころ)

敗戦によって日本は、初めて米軍の占領下におかれることになった。当時は、一般的に「言論の自由」を得ることになるが、占領軍やその政策、とりわけ税について、そしてマッカーサーへの批判は許されない状況下にあった。敗戦当初から中小業者は、消費物資の生産に奮闘していた。しかし大企業は、インフレによる物価上昇をあてこみ生産をサボタージュするにいたった。その結果、生活関連物資はもちろん、すべての工業生産が戦前の一割から二割に激減するに至り、中小業者は急激な経営難に陥れられた。そして、臨時軍事費のためとって紙幣の大量印刷を行うことで、猛烈なインフレが国民を襲うことになった。国民生活は、極度な食糧難と生活物資の不足や交通輸送機関のマヒ、失業者も1300万人を超え、国民は苦しみのどん底におかれる状況になった。占領軍は、本国の軍事費で負担するべき物資や労働力などの現地調達費用を駐留費として日本政府に求め、日本銀行に『連合軍口座』を開設させた。さらに政府は、増額される占領軍費用の「終戦処理費」や銀行救済の「金融機関補償費」、大資本に支払われる「価格調整費」などの支出のためと称し、何回もの追加予算を重ね、それを国民に対する重税によって賄おうとしたのである。そして同時期に、占領軍は進駐軍の宿舎や慰安・休養等の収容施設として建造物接収にのりだすことになった。東山区での接収建造物は、「都ホテル・第一赤病院並びに看護婦宿舎・祇園乙部組合事務所二部屋・元野村銀行所有の祇園町北側252の二階建事務所・福稲柿本町と三条神宮道の駐車場・第一赤十字病院新築2棟・松風株式会社・円山公園の長楽館とその横の土地・祇園四条北側286のギオン社・将軍塚・日赤前の竹屋旅館」(「昭和22年3月京都府行政文書・木村前知事・山本知事事務引き継ぎ演説書 渉外課接収地一覧表」より)となっている。当時の東山区の情景を聞き取りすると『当時の道路には信号もなかった』『ジープがすごい勢いで走っていた。あんなジープにひき殺されて

も何の保証もない。道を歩くのも怖かった。』(当時、修道学区の小学生)『米兵に襲われかけた』『お寺のなかで大声で騒いでいた』などと語られている。相当数の占領軍による市民への被害があったと見え、京都府渉外課記録には、進駐軍被害者へお見舞金支給記録が残っている。

そんな中での中小業者に向けられた重税策は、耐えられない過酷なものだった。中小業者に向けられた重税策は、アメリカの日本占領費用を調達するための「戦後処理費」と称されるもので、戦時利得税、財産税、物品税、営業税、遊興飲食税、入場税、戦時補償特別税、増加所得税⁶といった新しい税法として、次々と施行された。これらの重税は、申告納税制度の導入⁷や納税義務者の範囲の拡大で、今まで税金を払ったことのない零細な国民まで課税が広がる中で国民を直撃することとなった⁸。とりわけ増加所得税は、税務署が無差別に根拠なく国民へ割当課税をし、収奪するという酷いものだった。さらに税務署は、中小業者・国民に、とうてい払いきれないような税金の更正・決定を乱発(昭和47年分の申告された所得額は80%以上が更正によって追加された)した。その結果、払いきれない税金を滞納する国民が続出することになった。京都では、その税金の取り立てに異常な行動が起きていた。東山区は馬町一部を除いて被災家屋が少なく家財道具が残っていたためだろうか、占領軍の指示で毎日15件の差し押さえ物件の直接回収が横行した。病人のフトン、畳、仏壇、時計、タンスまで差し押さえ、トラックを横付けにしてひきあげる「トラック徴税」は過酷なものである。その頃の様子を、東山の中小業者から聞き取りをすると「差し押さえの紙が家中にペタペタ貼ってあったことを思い出す」「辞書まで差し押さえされて学校に持って行けなかった」「戦後の生活が厳しい中で20円もの更正を受けて、一家心中せなあかんと考えたこともある」など「差し押さえの恐怖」の印象が数多く語られている。聞き取りをすればするほど「差し押さえ」の話が出てくるのは、よほど広く多くの人々が「差し押さえ」を経験したと思われる。こうした「税金地獄」に毎日のように自殺者や一家心中が続出、その数は関西圏だけで年間5000人を超えたとされている。これらの税金取り立ては、税務署員がアメリカ占領軍の直接の指揮監督の下に、国民から強制的に徴収したものである⁹。終戦連絡京都事務局発行の「京都事務局月報」(外務省外交史料館所蔵)に

はアメリカ占領軍が、税に関して異常なまでも神経をとがらせ直接介入したことが示されている。農家も例外ではなく「食糧管理法」による米・麦などの強制供出が行われ、それに応じない農民に、警察官と米軍MP（憲兵）がジープで乗りつけ、農家から米・麦を「強奪」するなどの行為が日常化していた。

敗戦直後のこの時期、中小業者・国民は「生きんがため」の行動を行った。それは、意識しないものの「人間としての権利」「生存権」の行使につながるものであった。そして日本共産党が公然と活動を開始するようになり、国民の運動は急速に高揚することになった。ここ東山区においても、税務署・警察・占領軍に命がけて闘った中小業者がいた。東山の税金闘争は、運動の規模やその激しさからも京都府下の中小業者を励ますものとなっている。東山区において当時のことの聞き取りを行った。月輪学区の高橋太吉さん（左官業90歳 当時28歳）は、当時を振り返り、しゃきっと語っている。「仕事から帰ってきたら、家財や時計が消えていた。カカアに聞いてみると税務署が、トラックを横付けして運んで行ったという。当時の自分は、兵隊から帰ってきたばかりで血気盛んやった。すぐ税務署に行って、署長に直談判しようとしたら（署長は）逃げ出し、副署長みたいなものが『持ってかえたものはすぐ返す』といった。腹がたったので『一期も二期も税金は払ってある。家財を持っていくのは盗人やないか。国家は国民から泥棒するのか』と怒鳴りつけてやった。その足で民商（当時は東山生活を守る会とっていた。事務所を持たず転々としていた。）を探し『国民は団結して闘わなあかん』と言って入会した。翌日、自民党の国会議員をトラックで探し『自民党は国民から盗人するのか』と抗議した。それから税務署や国と闘うには大勢の仲間がいる、人を集めないかんと行って行動した。」「税務署が来たら金やバケツをたたいて会員を集め署員を追い返した」一橋学区の中村さん（73歳当時中学生）は「（民商創立以来の会員の）文化堂さんのタイショウが、徴税トラックの間に入って差し押さえ執行者を取り囲んでその執行をやめさせたというのを聞いたことがある。皆がすごいことやと言っていた。」「新道の指物師のマッチャンは、徴税トラックが来るたびにトラックの前で座り込んで運転させないようにし抗議した。とよく言っていた。皆で税務署に直談判にいて、税金まけさせた。

みんな命がけて頑張らった。」と宮川町の元おかみさんも話してくれた。

当時の笑い話に、「火事だ」「どこだ」「税務署だ」「そんならほっとけ」「机ひとたたき一万円」税務署との集団抗議の中で闘ったところで税金が減税されたとある。当時の生きるがための壮絶な庶民感情を表しているものだ。そうした中で、東山区民の切実な怒りは高まり、1946年には円山公園で勤労所得税撤廃京滋労働者大会、1947年では陶磁器労組先頭に清水焼業界挙げての物品税撤廃運動がおり、華頂会館では全市料理飲食業者大会が開催され、1948年（昭和23年）3月15日六原小学校に1200人集まる「東山悪税反対区民大会」が開かれた。そして東山納税民主化同盟（後の東山民商）が結成されている。1949年には、陶磁器労組と陶磁器業者が主催する「清水焼を守る物品税撤廃促進大会」の今熊野小学校での開催、さらに東山納税民主化同盟主催の「大口脱税糾弾人民大会」が行われ、1950年には今熊野小学校で「産業防衛、生活擁護のための東山区民大会」が17団体と町内会個人の参加という壮大な規模で開かれることとなった。当時の東山の運動の広がり、支配層に強烈なインパクトを与えた。民商創立にかかわった方々が「数は力や、仲間が増え、多くの仲間と団結したとき敵の攻撃を打ち破れるし具体的な成果も得ることができる」と共通して語っている。その後も税民（納税民主化同盟など）と日本共産党東山細胞の共同闘争が全学区に広がり、トラック徴税や競売に反対するなど税務署と交渉が頻繁に行われた。この年の11月24日には、日本共産党東山細胞が東山税務署と集団交渉を行った。そして闘争の中で、申告を税民がまとめて出すことや「『税務署員の面談心得』の発行などが行われるようになった。

当時のスローガンは『天下り更生・決定、割当課税反対。』『先ずめしだ。そして商売。あまりがあれば税金だ。』と言われていた。

3 東山母親大会のあゆみ（2003～9年）

1) はじめに

1961年8月、第7回日本母親大会が東京で開かれたとき、母親連絡会のなかった東山から、一人の女性が左京母親連絡会に入れてもらって参加したという

事実と、翌年の日本大会が京都で行われるということに奮起した、新婦人結成や全入の会¹⁰で活動していた方や教組の婦人部有志が呼び掛け、1961年12月東山母親連絡会が発足した。その後、東山母親大会が定期的に開催され、現在に至る¹¹。

私が東山母親大会に直接かかわるようになったのは、第32回(2003年)からで、当時の東山母親連絡会事務局長の藤原美紀子さんよりその役を引き継いだことによる。それまで20年あまり所属の組合(全国福祉保育労)で動くことが多く、地元へ目を向けるということがなかったように思う。自分の関心事に変化を感じるようになったのは、わが子が3人とも保育所を卒業し学齢期に達した頃だった。以前からライフワークは“子どもと共に”といった感じだったので、自分が気に入ったもので子どもの成長にプラスになると思えば、お芝居・コンサート・各種イベント・教育文化芸術のあらゆる施設・キャンプなど、常に情報をキャッチしながら連れまわした。同時に、子どものおかれている学校教育のあり方や教師の労働実態を知るにつけ、改善する必要を強く感じ、福祉保育労より教職員組合とのつながりのほうが、ウエートを占めるようになってきた。そんな状況の中で、私は自分の子どもを通じて大きく教育問題に関心をもつようになり“生命を生み出す母親は、生命を育て 生命を守ることをのぞみます”を、ただ一つのスローガンに運動している母親連絡会(東山母親連絡会)の事務局長になる決意をした。

2) 東山母親大会を振り返って

事務局長になって初めての第32回東山母親大会は、2003年10月保養所きよみずで約80人の参加で行った。記念講演は《ありのままがいいんだよ～少年事件から見えてくる子どもの心～》をテーマに滋賀大学教育学部助教授(当時)の倉本頼一氏に講演いただいた。大学で学生を教える傍ら、親と子の教育相談、指導に悩む教師の支援を行っておられる倉本氏は、現代の子どもに贈るメッセージは「ありのままがいいんだよ」「あなたはあなたのままでいいんだよ」という自己肯定の心を育てることだと言われ、事件の加害者となった子どもの作文や実際ご自身が36年間小学校のクラス担任をされていた時の子どもたちの作品など、多数紹介していただいた。その作文から子どもたちの本音を丁寧に読み取るお話は、参加者全員胸

にくっとくるものがあった。そして大会のなかで、学級崩壊を押しとどめようと昼も夜も年末年始も心身を休める間もなく仕事を持ち帰り、毎日気力をふりしぼって教壇に立ってこられた宇治市の小学校教諭が、1994年1月19日に子どもたちの目の前で机上に倒れこみ8日後に43歳の若さで亡くなったという事件の報告があった。荻野過労死裁判だが、過労死とは認められなかったのが、10年かかって先月9月16日逆転勝利し、京都府も上告を断念し、荻野恵子さんの死を過労死と認めた大阪高裁の判決が確定した。これにより名実ともに教育現場の実態が認知されたことになり、今後の市教組の超勤裁判にも影響があるものと思われる。

第33回東山母親大会は、2004年10月大谷中学・高等学校をお借りして、120人の参加で、ドキュメンタリー映画“風といのちの詩”の上映をした(午前中教育・平和・くらしの3つの分科会あり)。この企画は、新婦人新聞の一面におおきく自然の中でたわむれる馬の親子の写真と共にこの映画の紹介を読んで、「これだ!」と直感したことによる。すぐその連絡先に電話し、この映画の内容、制作にかける思い、上映先の反応、各新聞雑誌等での記事のコピーを郵送してもらい実行委員会で検討し、上映決定した。この映画は、宮崎県内で年間を通じて撮影した野生の馬や猿を、自然の風景と共に紹介。出産や台風などに耐えて生きる姿、その死を撮影した映画だ。世界中どこかで戦争・内戦がありテロの恐怖におびえ、国内でも毎日のように子どもを巻き込んだ凄惨な事件が報道される現実のなか、ぜひ親子で鑑賞して“命の大切さ”を共感していただきたい、日々の暮らしに疲れ切った方には、ホッと癒しの時間、心の栄養剤にしていきたいと思って企画した。この大会のなかで、「府立洛東病院の存続を求める特別決議」が上がり“府民の財産である洛東病院をつぶさないで”“リハビリ医療の充実なら洛東病院の存続を”と、署名等の行動提起があった。そこで働く職員・患者は、廃止の方向を新聞報道で知ったという有無を言わせぬトップダウンのやり方に強い憤りを感じる。運動が実らず、1876年(明治9年)創立以来地域の医療に貢献してきた府立洛東病院は、2005年3月末をもって廃止となった¹²。しかし、引っ越してまで進んだりハビリの医療を受けようと集まってきた患者さんや日夜洛東病院を守ろうと奮闘してきた職員、その人たちを周りで支

えてきた支援の人たちの運動は今後の教訓にしていかなければならない。それとかねてから、大会の会場問題では毎回頭を悩ませていて、公共の財産である総合庁舎の会議室を貸してもらえないかと、東山母親連絡会として陳情書を提出する取り組みをした。短期間で401筆あつめ、区役所と市議会へ持っていき9月議会で取り上げてもらうことと、各会派に協力をお願いした。思いは届かなかったが、その後東山保健所跡地に、東山区社会福祉協議会・六原自治連合会・六原消防分団のはいった「やすらぎふれあい館」が新しく建設されたことを知り、申し入れに行き「暮らしの工房」に登録された。次回から一般より低料金で借りることができるようになった。

第34回東山母親大会は、2005年9月やすらぎふれあい館をお借りして、総選挙の投票日となるアクシデントにもめげず、87人の参加で予定通り開催した。記念公演は、「憲法は変えてはならないー私がこの結論に至った理由」と題して、元駐レバノン大使天木直人氏にお話しいただいた。この大会の直前に総選挙に立候補され、出席が危ぶまれたが無事到着、「私にとって最初で最後の国政選挙の経験も交えた本邦初公開のお話をさせていただきます」と、ご両親のお話から外務省でのお話まで、実直に思いのままに語っていただいた。外交官として第一線で小泉首相と対峙してきた方のお話を間近で聞くことができ、参加者の反応も新鮮だった。

第35回東山母親大会は、2006年9月やすらぎふれあい館をお借りして、80人の参加で開催した。特に、この年は午前中の分科会のうち<教育>で、「性と生を考える、3歳から思春期まで見通した性教育を」をテーマに取り組み、地域の若い母親への呼び掛けに力を入れた。自分の身体を守る（大切にする）性は、やがて思春期を迎えたとき生きる力を育てる性につながるということを、助言者の小田切孝子さんより学び、娘・息子に悩む母親の心をいくらかは、軽くできたように思う。午後からは、京都母親連絡会事務局長衣笠洋子さんより、知事候補として府内各地を巡って対話した報告や、1955年7月のスイス・ローザンヌで開かれた、世界母親大会から出発した日本の母親運動の歴史のお話があった。当時を知る方々の目頭を熱くし、参加者全員に私たちの運動の歴史は大きな社会の流れなのだと確信させる貴重なお話だった。2つめに、京都保険医協会の久保佐世さんより、「どうなる国民

皆保険?!~いのちをけずる医療改革~」と題して、「保険証一枚で いつでも・どこでも・だれでも・必要な人に・十分な医療を」とされてきた、これまでの医療制度が根本から変わることを学んだ。二つの特別決議、《憲法と教育基本法の改悪に反対し、憲法九条を守り、教育基本法を生かすことを求めます》《家庭ごみ有料化の十月実施を中止してください》も採択された。

第36回東山母親大会は、2007年9月、やすらぎふれあい館をお借りして、60人の参加だった。午前中の分科会では、新しく”平和”で、ワークショップ形式をとり、思い思いに絵筆や墨で、野の花・夏野菜を画材に作品づくりを楽しんだ。環境問題としては、DVD『不都合な真実』の上映、教育問題としては、いよいよ新聞報道で表に出た東山区北部の小中一貫校を議論した。午後から、弁護士古川美和さんより“女性と憲法”をテーマに学んだ。特別決議《子どもたちから平和な社会・楽しい学校を奪う、改悪教育基本法の学校現場持ち込みを許さず、平和憲法を守り生かすことを求めます》が、採択された。この大会以後東山母親連絡会として、「東山の学校統廃合を考える会」に加わり、各地域で学習会や懇談会を開いて区民の皆さんへ情報を提供し、問題意識をもってもらえるよう運動を進めてきた。

第37回東山母親大会は、2008年9月やすらぎふれあい館をお借りして、70人の参加だった。会場には、新婦人会員の63枚のピースフラッグが飾られ平和を願う熱いメッセージが伝わってきた。午前中の分科会は、DVD『シッコ』の上映と、“どうなる？東山の学校統廃合”をテーマの教育の分科会の2つだった。『シッコ』の上映は、午後からの“怒り爆発！後期高齢者医療制度、どうなる？国民皆保険！”をテーマの京都府保険医協会久保佐世さんの話と連動していて好評だった。後期高齢者医療制度は、世論の批判はもちろん与党議員からも見直し廃止を求める声がある問題だらけの制度。社会保障費年2200億円削減にもあるように、政府が考えている医療改革の基本的な考えは、医者に行かせない・入院させない・入院する場所をなくすの3点との事。窓口負担も高くなって病院にいけなくなった私たちも大変だが、病院を経営する側も本当に大変だということを学んだ。

3) 今年の第38東山母親大会について

さて、東山母親連絡会事務局長として7回目の母

親大会を企画することとなり、今までを振り返るとその時勢にあった著名な講師に来ていただいたのは間違いない。血なまぐさい少年犯罪が多発し子をもつ親として「なぜ?」「どうして?」と、疑問と不安でいっぱいになった年には、長年の教員経験を生かし親子の教育相談や教師の支援をしている方に来ていただいた。また、新婦人新聞に載っていたというだけでひきつけられるように連絡を取り、九州宮崎から映画監督を呼んだり、筋を通し憲法に従い職務を全うして事実上解雇された元駐レバノン大使にも来ていただいた。直前の電話で、「選挙に出ることになったんですよ。」と照れたように言われ、「じゃあ来ていただけないんですか!」とすごむと、「行きます。終わってますから」と激務だったに違いないのにちゃんと来て下さった。このように講師から講演を聴くスタイルは、どの行政区でも定番だが、そろそろ東山らしい東山だからできる母親大会とは?と考えはじめた。5月の第1回東山母親大会実行委員会で検討し、東山で活動している地元の要求でうまれた団体に集まってもらって活動報告・交流しようとなった。当日は、時間の関係で限られた団体になるから、“東山のくらしを守るマップ”を作って、いろんな団体を学区ごとに分けて入れようということになった。学区ごとに分けようと思ったのは、その団体探しに東山区社会福祉協議会（以後社協という）を訪ねたとき、学区単位でくらしの支援体制をとっている事を知った。健康すこやか学級のように、各学区社協が月1~2回自治会館・学校の空き教室などで開催し、地域住民の介護予防、仲間づくりなどを行っている。具体的には、健康チェック・お食事会・防犯や健康に関する学習会などだが、多いところでは1回に50人の参加者があるという。歩いていける距離に集える場所がある。コンパクトな範囲だからこそ、すみずみまで支援の手が行き届く。他にも、東山区社協では、高齢者（認知症や物忘れのある方）や知的障害や精神障害などのある方が、地域でいつまでも安心した生活を送れるように支援する「地域福祉権利擁護事業」、自力で外出できない人に対する「福祉送迎サービス」、さらに一日ゆっくりと過ごせる集いの場「ふらっとりすべえす」も実施している。東山区社協の方のお話を聞いていて、“学区”という長年受け継がれてきたちょうどいい単位に魅力を感じ、社協の活動の重要な任務を学ぶことができた。同じ時期に、「いいまちねっと東山」主催の学習会があり京都の住民自治

を学び、その時購入した『京都の「まち」の社会学』鯉坂学・小松秀雄編は、町内会/自治連合会の構成と関係・役割がよくわかった。

「例えば京都市では、町内会や自治連合会を地域住民の自主的な組織と位置付け、公式的には行政補完の役割は、各町内から選ばれた市政協力委員とそれを取りまとめる元学区の市政協力委員連絡協議会に委託している。ただし、この連絡協議会は各種団体となっていることが多く、これらの役員や町内委員が町内会や自治連合会の役員を兼務することも多い。そのため、実質的には、町内会や自治連合会が、市政協力委員や市政協力委員連絡協議会と表裏一体の関係として、住民と市政をつなぐパイプとなっている。また、町内会と自治連合会は、担い手や、運営資金、サポートにおいて、相互補完的な関係をもつ。町内会は、町内での活動に加えて住民と自治連合会をつなぐルートとなり、住民から町内委員と自治連合会への分担金を募り、その担い手と運営資金を自治連合会本部や各種団体へ提供する。一方で自治連合会は、元学区での活動に加えて町内と行政機関や公的機関をつなぐルートとなり、行政機関や公的機関に町内会を通じて住民意見を取りまとめて伝達し、住民に町内会を通じた行政連絡と各種団体の暮らしの相互サポートを提供する。」

「自治連合会では、上述したように自治連合会全体やそれぞれの各種団体の活動によって、暮らしの相互サポートの他領域を網羅している。その一例を挙げると元学区の運動会や夏祭りなどの親睦行事のほか、防災訓練や防犯活動、交通安全や子どもの登下校時の見守り活動などの共同防衛機能、高齢者への配食サービスや子育て支援などといった地域福祉機能などが見られる。」

「京都市内には町家など戦前からの木造家屋が他の大都市に比べて格段に多く、建築物の不燃化という意味では火事には弱い特徴がある。また、込み入った路地も多い。けれども、消防庁の調べでは、火災発生率は全国の大都市で一番低い。人口当たりで大阪市の3分の1近い。…火事を出さないためには、消防体制がしっかりしていることや、市民一人ひとりが気をつけていること以外に、町コミュニティの絆や『町』の共同した目があることが大きな意味をもつ。」

『京都の「まち」の社会学』より引用¹³と、いうふうに行政と地域住民をつなぐ役目を持ちながら、独自に、災害時にも即対応できる地域に根差したネット

ワークがつくられている。ここにもっと私たちは積極的にかかわっていく必要があるのではないかと痛感した。

さて、今年38回目の東山母親大会だが、先に書いたように東山社協の活動と東山区福祉総合マップから登録の団体・事業所を加え、NPO法人等地域住民の要求によって生まれた団体もさらに加え、一つのマップに制作した。それを、第38回東山母親大会参加者に配布した。当日は、シンポジウム形式で、住民要求で生まれた団体4つにお越しただいて、いいまちねっと東山にコーディネートしていただいで進めた。NPO法人「助けあいグループりぼん」・NPO法人「東山やすらぎの会」・「東山の学校統廃合を考える会」・「東山区不登校ひきこもりを考える親の会」より、活動内容・やりがいを感じているところ・苦労しているところ・今後の展望などが語られ、フロアからの質問にも答えながら、すすめられた。コーディネーターより「今の社会の実態（生保受給者・孤独死・自殺者・虐待・老老介護など）から、何とかこの現実を打開しようと東山で、行政の届かない部分を担う形で立ち上げられた方たちが集まって交流するこの場は、とても意義がある」といわれた。参加されていた東山区社会福祉協議会の方も、「各学区に社会福祉協議会があり地域の人といろんな取り組みをしている。問題点は高齢化・少子化で役員の担い手がないこと。これからは、既存の団体に新しい団体を結び付けて「協働」していくことが大切。10年先には、「協働」の取り組みが普通になるのではないかと考える。既存の団体と新しい団体が協力していくことでどちらにもメリットがあるように、社会福祉協議会がコーディネートしていく。」などと発言され、出席しているそれぞれの運動団体が認められたことに、確信をもった。

以上、今年の東山母親大会の概要だが、参加者の感想も、東山の事がよくわかったと好評だった。

4) 学んだこと

課題にすべき感想は、「女性の視点から見た東山の取り組みもあるのではないか?」「生きる命綱となるような、生活相談所・困ったことを気楽に相談できる弁護士さんなど、東山にいないのか?」など、“マップ”に今後書き加えていく必要を感じる。そして、1 “継続は力なり” 毎年80人前後の参加者を作り出すことの意義。

2 今回社会的に弱い立場にいる母と子をサポートする団体がこの東山にあるということを知る機会になったということ。

3 住民要求で生まれた団体がこの先行政と対等の立場で連携をとることができる展望を感じたこと。

4 今回の“マップ”は、まだ不完全。さらにくらしを守る団体・運動を加えていきたい。

以上を、私たちは学んだ。1961年の「なんとしても東山に母連を!」とあふれる思いで呼びかけ、志を一つにした13人の女性と東山母親連絡会を発足させ、運動を進めてきた、素晴らしい先人のあゆみを引き継いでいこうと決意する。“マップ”作成にあたり、区役所まちづくり推進課では、今年の東山母親大会のことから、もっともっと東山を好きになりたくて誰が見てもつながりたい頼りたいという連絡先がぱっと見えるもの“マップ”をつくりたい!と、高ぶる気持ちを伝えると、こころよく福祉事務所の担当者のところまで連れて行って下さった。東山区社会福祉協議会では、同じく気持ちを伝えると、「いい取り組みですね」といってくださった。大げさかもしれないが、行政に励まされ後押ししてもらって、今年の大会は成功できた実感する。シンポジウムのコーディネーターを引き受けてくださった「いいまちねっと東山」には、全面に運営に尽力いただいた。第38回実行委員会一同、格別の思いでやりきることができ満足している。

4 まとめにかえて

私たちのグループは、9月に「京都洛東病院の歴史を探る一語られなかった歴史的事実にせまる一」を雑誌『いのちとくらし』No.28、で全国発信した。今回の研究Ⅰ、Ⅱをまとめると、全体として研究ノートであるといえよう。東山という狭い地域の歴史研究であり、多くのメンバーは50年以上この地に育ち、住んでいて、生活を通して地域の歴史を知っている。文献も大切にしたが、聞き取りなど足でかせいだ研究である。地域の多くの人々に励まされつつ集団討議をしてきた。行政が行う調査のようにお金はかけていない。しかし地元大学の協力は大きかった。これからも足を使い、研究ノートから研究論文にしていきたい。文理閣の黒川富美子氏より全国に発信をできることは何かと問われたが（発足時に寄せられたメッセージ）、それは、谷口善太郎のことと、洛東病院の歴史である

う。しかし、京都の一つの区の平凡な歴史も大切にしたい。

私たちの集団は、研究会、研究運動はするが要求運動をしない。しかし、個人として、「障害者参政権」、「小学校統廃合」などなど、要求運動も源流を探る中でせざるを得なかった。またこの成果も大きい（障害をもつ人々の参政権研究会ニュース）。

また、地元、華頂短期大学の紀要には、仏教と関わった論文が、これと同時に2本できる予定である。

探るべき課題は山ほどあり、資料も集まりつつある。3年を目途にがんばりたい。地元はもとより、大阪堺、全国の歴史研究者の協力と批判をお願いしたい。私たちの活動は、1年弱、本当に1歩を踏み出したに過ぎない。大きな口をたたくなと言われることを怖れつつ。

誰が言ったか知らないが、「歴史を学ばない者に未来を語る資格はない」。この言葉は活動家を自認している人におくりたい。このような地域史研究が全国各地で起こることを期待して、まとめとしたい。

なお、この論文を大阪健康福祉短期大学の紀要に発表する理由は、藤本が在職中に歴史研究の必要を深めたことと関わっている。

脚注

- 1 加藤則夫、1999、「谷口善太郎年譜」、谷口善太郎100年・没後25年記念のつどい実行委員会
- 2 梅田勝、1994、「谷口善太郎」、『京都礎をきざいた人びと』、京都市民報社
- 3 佐々木敏二、1986、「初期の京都労働学校」、『近代京都のあゆみ』、かもがわ出版
- 4 谷口善太郎、1994、「河上肇」、『京都の礎をきざいた人びと』、京都市民報社
- 5 前掲1
- 6 戦前の課税方式は、前年実績をもとにして割り当てる賦課課税制度だった。しかし昭和22年度から申告納税制度に切り替わることになった。その結果、21年度の実績所得に対する課税が空白状態になった。そしてインフレによる見込みの収入増があると想定して、政府は国民・中小業者に課税を割り当てた。このときの申告税制度とは名ばかりで（『昭和税制の回顧と展望』上巻、大蔵財務協会に詳しい）、その実態は占

領軍の命令によって、上からの割当課税を、占領軍の直接の指令と援助の下におこなっていたものである。

- 7 昭和22年税制改正で申告納税制度が導入されたが、当時は「現年度課税」（その年の所得税をその年度中に申告納付する）で、個人所得税については、その年の所得について毎年4月、7月、10月、翌年1月の4回に分けて3回は予算申告、最終回に確定申告をする制度となっている。「仮更正」というのは、その予算申告の額について申告額を更正して所得をつり上げること。従って、前年実績に基づいて、前年の確定税額の3分の1を予定納税するという現在の方式とはまったく違うものである。年間を通じて初めて所得が確定するはずのものについて予算申告の段階で更正処分をして、それを強制的に超憲法的な存在であった占領軍の指令に基づいて、トラックやジープや拳銃で直接徴収するというやり方は、まったく納税者の権利を無視したものである
- 8 「1937（昭和12）年に人口の1.6%であった所得税納税義務者は、申告納税制度が導入された1947（昭和22）年には25.6%になっている。一世帯四人とみて、ほぼ全世帯に税金がかかってきたことを意味している」〔京商連50年のあゆみ P11〕
- 9 京都軍政部（1946年1月28日第103軍政中隊が担当し府庁舎においた。初代軍政官コールマン少佐）は、納税事務担当官を置き、「納税促進に積極的の援助を与えること」（終戦連絡京都事務局発行の「京都事務局月報」・以下「月報」（外務省外交史料館所蔵）第1号昭和23年2月）としている。「軍政部グレシヤム中尉は、21日市内7税務署長の参集をもとめ、（当局からも係官出席）席上22年度徴税の困難であった経験にかんがみ、23年度徴税に当たっては、納税担当官は税法を十分研究して完全な徴税計画を樹てることを要望した。なお悪質脱税者に対しては徹底的に取調べを行い必要な場合、軍政部も協力し、又悪質者は新聞にも発表する旨説明があった」（「月報」第7号昭和23年6月5日）「租税計画はすべて連合軍の完全な保証と活発な

監督を受けている。この運動はまず中京税務署の提出した毎日15人の納税違反者リストの発表を含み遂次に他の税務署からも毎日同様のリスト提出される。来週も引き続き各税務署は一日15人ずつの摘発計画を進めるはずである。この計画案は京都軍政部が承認したもので京都の各税務署吏員は全市民に納税の督促を行うとともに…」「14日京都軍政部民間情報課から第1回分として中京税務署管内の10名15日は東山税務署管内と逐次発表されている」(「月報」第10号昭和23年7月20日)「京都軍政部では、徴税の円滑化を促進するために、7日市内各税務署、地検、地裁、市、国警、府市関係、新聞の各代表を招致して軍政部長リゴン大佐等列席の下に協議会を開催した。…(略)…第三人への課税に関しても…もし妨害があった場合は占領軍で援助する旨の方針が再確認された。」(「月報」第22号昭和24年1月20日)など占領軍は、直接に日本の支配に介入した。

- 10 「京都高校進学を希望する者を全員入学させるための高校増設を実現する会」(略して全入の会)、京都の婦人のあゆみ〈京都戦後婦人運動小史〉1976、P 130参照
- 11 「新婦人結成や(1962年10/19東京にて、11/23京都にて結成大会)全入の会で活動していた方や教組の婦人部有志が、知恵をしぼってまず手をつけたのは、電話帳を開いて、〇〇労組、〇〇病院、〇〇企業組合、〇〇事務所、保育所など婦人のおられそうな所へ、もう片っ端から「東山母連結成」の呼びかけ文を送ることでした。…結成当日…東山郵便局、洛東病院、専売病院、京女、華頂、東山区役所、「月の輪中学高校全入の会」の方などほとんど初対面で13名!「地域に根ざす運動なのだから今、ここから出発しましょう」と、東山母連が発足したのでした。61年12月の年末も半ば近い日でした。」
市高退教ニュースNo102 2009年7/3
医王滋子 みたび日本母親大会を京都に迎えて
思うこと より引用
- 12 永利満雄、藤本文朗、渋谷光美、2009、「京都東山の洛東病院の歴史を探る一語られなかった歴

史的事実にせまる一」参照、特定非営利活動法人非営利・協同総合研究所のちとくらし

- 13 鯉坂学・小松秀雄編、2008、『京都の「まち」の社会学』、世界思想社、第2章京都の地域コミュニティの地域運営アソシエーション 田中志敬、あとがき 参照

参考文献

- 1 谷口善太郎と東山区
「東山診療所50年のあゆみ」、2002、東山診療所
谷口善太郎、1986、「清水焼風景」、『谷口善太郎集』
(日本プロレタリア文学集・29)、新日本出版社
清水焼(創立60周年記念誌)、1984、京都陶磁器労働組合
谷口善太郎、1953、『日本労働組合評議会史』、青木書店
- 2 東山区の敗戦直後の状況と自営商工業者の闘い(東山民主商工会創立のころ)
荒敬編集・解題、1994、「日本占領・外交関係資料集 終戦連絡地方事務局・連絡調整地方事務局資料 第2期 第7巻(京都)」、柏書房
立命館大学産業社会学部鈴木良ゼミナール、1991、「占領下の京都」、文理閣
「陶労60周年誌」、1983、京都陶磁器労働組合
「日吉開窯90周年記念誌」、2003、京都日吉製陶協同組合
「京商連五十年のあゆみ」、2005、京都府商工団体連合会
「民商・全商連の五十年」、2001、全国商工団体連合会
中村政則、天川晃、尹健次、五十嵐武士編、2005、「戦後日本 占領と戦後改革第2巻 占領と改革」、岩波書店
衆議院会議録情報 第007回国会 予算委員会 第31号
立脇和夫、1996、「占領期日本の対外経済関係と外国為替銀行」、早稲田商学第371号
小柳津恒、1977、「京都民統の思い出」

A Study of Historical Approach to the Welfare and Innovation in Kyoto Higashiyama-ku (Part II)

Bunro Fujimoto*, Norihide Ito**, Hiroshi Fujita**, Mamiyo Yoshida**

Abstract

When we try to have prospects of the future about the welfare and innovation campaigns in Higashiyama Ward, we have to look into and know all about the history of its citizens' movement. To study the historical current by all the people living here," the Meeting to Discuss Welfare and innovation of Higashiyama" was set up.

We'd like to report on three points, making out the chronological table through our work.

1. The achievements by Taniguchi Zentaro — He was one of the founders of JCP and led the political innovation movement here in Higashiyama.
2. How were Min-sho (Democratic Storekeepers' Society) and labor unions organized here? After World War II self-employed persons stood up to serve tax collection.
3. History of the mothers meeting in Higashiyama

Keywords : Welfare and Innovation of Higashiyama, chronological table, He Hospital(For quarantine isolation)

*The Meeting to Discuss Welfare and Innovation of Higashiyama

Contact Address:

〒605-0953 13 Imakumano Minamihiyoshi-cho, Higashiyama-ku, Kyoto City

Bunro Fujimoto

Tel and Fax: 075-541-5270

**The Meeting to Discuss Welfare and Innovation of Higashiyama